

# 月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



道端に並べたイスが「男の居場所」(高知県室戸市、写真提供:平井利津さん)

## 特集

## 被災地で活かせる 各地の支え合い活動

- **手づくりの根城、これぞ男だけのサロン** ③  
通称“男の居場所”(高知県室戸市)
- **2タイプのサロンが、地域の生活を楽しくする** ⑤  
ほっとする会・とうふの会(秋田県湯沢市)
- **農業を通じたコミュニティづくり** ⑥  
シルバーパワークラブ(秋田県湯沢市)
- **組合で支える、地域での生活** ⑦  
やすおか  
泰阜村地域交流センター悠々(長野県泰阜村)

### まじわる災害公営住宅<sup>⑩</sup> ⑨

あすと長町復興公営住宅(宮城県仙台市太白区)

### まちの仕組み<sup>④</sup> ⑩

生活支援から地域づくりへ(新潟県長岡市山古志地域)

### 私の地域の元気興し「S-1 グランプリ 第2回いがす大賞」<sup>④</sup> ⑫

『原っぱサロン』特定非営利活動法人Jin(福島県本宮市)

### インタビュー あの人に会いたい<sup>⑩</sup> ⑬

子どものありのままを受け止め、支えることのできる社会を作る/  
特定非営利活動法人TEDIC 代表理事 門馬優さん(宮城県石巻市)

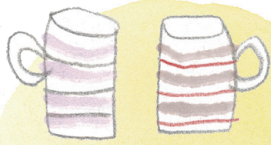
### 仮設住宅整理統合時の課題と対策<sup>①</sup> ⑭

(社会福祉法人 長岡市社会福祉協議会  
本部事務局地域福祉課 課長 本間和也さん)

### 宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ<sup>⑮</sup>

### 東北の元気<sup>⑮</sup> ⑯

栗林共栄会(岩手県釜石市)



# 被災地でも活かせる 各地の支え合い活動

生き生きと暮らす知恵は全国に

震災以降、被災地では、

とてもたくさんの支え合いが生まれました。

交流や見守り、心身の健康増進、居場所づくりなど、  
被災者自身が仲間を募って自主的に始めたものもあれば、  
支援者が仕組みをつくったものもあります。

ちょっとしたお茶飲みや趣味のサークルであっても、  
人と人をつないで、笑顔と元気を生み出す場となります。

仲間が集まって、いっしょにお茶をいただきながらおしゃべりを楽しんだり、  
ゲーム、スポーツ、手仕事、野良仕事などに精を出したりするひとときが、  
とてもたいせつな支え合いの契機になるのです。

支え合いは、非常時だけのものでも、  
被災地だけのものでもありません。

誰もが地域で生き生きと暮らし続けるための知恵と工夫は、  
全国各地に見ることができます。

震災をきっかけに始まった支え合いは、  
被災地が「被災地」でなくなっても、  
ずっと続けていく価値と意味を持っています。

被災地以外の取り組みが、そのことを教えてくれています。



# 通称「男の居場所」(高知県室戸市) 手づくりの根城 これぞ男だけのサロン

14時になると

丘に男性が集う

高知県室戸市奈良師の、畑や山が一望できる丘には、14時になると、どこからともなく男性が集まってくる。70〜80歳代が多い。

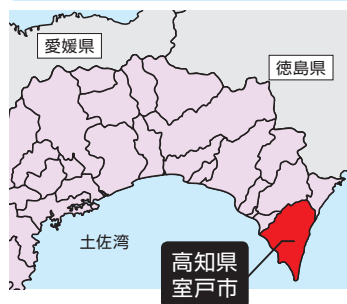
さわやかな風が通り抜け、鮮やかな緑が目まぶしいこの場所で、イスに腰かけ、畑で作業に励む人たちを眺めては、政治や相撲談義に花を咲かせる。花を咲かせる、といって、女性同士のにぎやかな



日陰のある所に横一列に並ぶ

高知県室戸市

人口	14,641人
高齢化率	44% (2015.7.31 現在)



おしゃべりとは違って、実に穏やかで無言の時間もある。向かい合って座るのはなく、全員が細い道路に沿って横一列に並ぶのも特徴的だ。

寡黙な男性たちが、示し合わせたかのように毎日14時に集い、ひとしきりコミュニケーションを楽しんで、16時を過ぎるころ、さりげなく去っていく。さながら女人禁制の雰囲気がある。誰が最初に始めたのかはよくわからないが、気づいたら男性によるサロンができ上がっていた。通称「男の居場所」である。

冬は「秘密基地」で

焼き芋を

集うメンバーはおよそ13人だが、自然発生的に生まれたサロンなので、誰が来

てもいい。徒歩だけでなく、自転車やバイクで来る人もいる。仕事をもっている男性たちが顔を出すこともあるという。

寒い季節になると、すぐ向かい側の畑に建てた小屋に移り、暖を取りながら焼き芋を楽しむ。大作業の得意な男性たちが建てたという。中に入ると、雨をしのげる屋根つきの半野外スペースがあり、壁には壁時計がかけられ、イスがたくさん置いてある。焼き芋の蒸し器は、元溶接工の男性が手づくりして仕上げた。一角には、焚き木用の薪が山積みされ、扉のドアには鍵までついている。なんとも遊び心がたつぷりで、幼いころの秘密基地づくりを思い出させるような場所だ。薪用の廃材を用意する人や、小屋が燃えないように管理する火元責任者など、自然に役割分担もされている。

自分たちで

手づくりした根城

集まっている男性の皆さんに話をうかがった。「ここはいい場所。夏は陰っ

て涼しいし、冬は小屋で焼き芋が欠かせない。外でみんなで食べるとおいしい」

「餅を焼くこともある。夏は、裏山からミカンやピワを採ってきて食べるのもいい」

「家内と一緒にミニデイサービスに行くのはいやだ」「公民館の集まりは女性ばかりで行きにくい。ここならタバコを吸ってもいい。ここに来ては多くの人は、同級生やインド洋でマグロを釣った漁船の仲間。かつての港の女の話を盛り上がることもあるよ」  
「畑や山の仕事を朝からして、昼から遊ぶのが日課」  
「ここで、あそこの店のしめ縄は安いとか、情報交換ばかりしている」



冬はたき火を囲む。石巻市など東北の港町もよく知る元漁師が多い

男だけのほうが気楽でいい。自分たちで手づくりした「根城」への愛着も感じる。

### 無邪気に楽しむ男性

楽しむ男性たちとは裏腹に、目の前の畑で作業する女性たちは、彼らの目にさらされて少し窮屈そうだ。でも、畑作業のアドバイスをしてくれる男性や、見かねて手伝ってくる男性もいて、悪いことばかりではない。ここでの女性とのかけあいが、また、男の居場所を活性化させている。

昔は、奈良師に流れる川のほとりで男性が集まっていたようだが、台風で流されてこの場所へ移ったようだ。20数年前から約3人の男性が集まり始め、12年前



畑の横に建てた手作りの小屋

## → 東北で活かせる!

- 地域で、自然発生的に生まれているサロンを発掘して、育もう!
- 男性同士のほうが気兼ねなく集まれ、手づくりの秘密基地が心くすぐる場に。

〔別冊 Juntos 高知室戸イ  
ズム宣言!〕(CLC刊)を再構成)

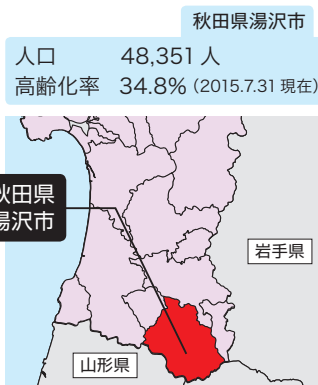
から人数がぐっと増えたという。一部の港やパチンコ屋の駐車場でも、このような男性のサロンが自主的に開かれているらしい。  
男性だっておしゃべりを楽しみたい。でも、女性ばかりの所には参加しにくい、もつと自由に、男性同士で遊べるところを!というところで生まれたのが、手づくりの「男の居場所」なのかもしれない。無邪気に楽しんでる男性陣の笑顔が忘れられない取材だった。



10日分しゃべって10日分笑う「ほっとする会」

ほっとする会・とうふの会(秋田県湯沢市)  
2タイプのサロンが、  
地域の生活を楽しくする

秋田県の東南端に位置する湯沢市は、人口約5万人、高齢化率32%のまちだ。ここでは住み慣れた地域で自分らしく、みんなと楽しく暮らしたいと考える住民が、町内会ごとに多様な取り組みを行っている。



毎月〇のつく日は  
お茶っこ飲み

にしんまち  
西新町第一町内会の町内会館では、2002年より毎月10日、20日、30日の〇のつく3日間に、お茶っこ飲みを開いている。「ここさ来るとほっとするものなあ」とお茶を飲みながらつぶやいた女性の一言で、「ほっとする会」と命名された。60〜70歳代の3人の世話役を含め、18人ほどの参加がある。会館に来る時間や帰る時間は各自バラバラ。お話しする人、歌う人、踊る人など過ごし方も自由だ。  
「デイサービスと違って、ここはなんでも自由。誰が何をしてもいい。『今日は〇〇をしましょう』というのがないから、みんな気楽に参加できるのだと思いま



豆腐一丁あれば男だけでお酒が飲める「とうふの会」

「す」と、世話役の一人である小林輝子さんは話す。すると、参加している人たちが口々に「そうだ、そこがいいんだ」「何やったって笑ってしまうもんなあ」「風邪引いでも来ねくちや」と応える。

当初より参加している遠藤トスさんは、「いろんな話して、みんな笑って。何もしなくてもここに来ると落ち着くの。ほっとする会がある日は、余計元気になるんだ」と笑う。会館までは歩いてくるそうで、健康のためにもなっているという。

ほかの町内からうわさを聞きつけて参加している人もいる。違う町内ということで最初は緊張もあつ

たが、参加してみるとても居心地がよく、「おもしろくて休んだことがないんだ」と話す。

そんな話をしている間にも、音楽に合わせて歌う人、踊る人、「ほっとする会」で旅行に行ったときに買ってきたというおもちゃのお札でできた扇子でみんなをおおぐ人もいて、大笑い。涙を流すほど笑ってしまう人もいた。

### 互いに気にかけて、助け合う

「ほっとする会は月に3回だから、楽しみが増える部分もある。いつも『10日分しゃべって10日分笑ってください』って言っているんです」と世話役の高橋孝子さんは話す。

月に3回といっても家族との時間もたいせつにしてほしいとの思いから、日曜日と祝日に重なった日は休みにするという。集まる日が少ないときは、開催日がふだんよりさらに待ち遠しくなりそうだ。自由参加の「ほっとする会」ではあるが、いつ

も参加していた人が来ないことややはり気になり、何かあったのでは…とみんなが心配になって、世話役が自宅まで声をかけに行くことも。「お互い心配するとわかつているから、用事があつて来れない日は連絡をくれるんです」と世話役の石井ユミ子さんが語る。

2011年の東日本大震災のときには、すぐに一人暮らしの人の自宅へ駆けつけた。一人では心細いだろうと、ほっとする会の仲間同士で自宅に招き、一緒に過ごしたという。会わない日でもお互いが気にかけて、助け合う関係が生まれている。

### 豆腐一丁で、男だけの飲み会

御嶽町第一町内会では、2002年12月より、男性だけの食事会「とうふの会」を町内会館で60回以上開催している。「豆腐一丁あればお酒が飲める」をコンセプトに、開催日の調整から、料理の献立づくり・調理、後片付け

まで、すべて男性が当番制で担う。夏は冷奴、冬は湯豆腐にプラスして、簡単な料理をこしらえる。ほとんど家事などしたことのない男性たちの、ドタバタな調理は会を盛り上げ、簡単な料理も「会話」があれば一層おいしくなる。

とうふの会は、当時の町内会活動が会長だけで回っていたことから、地域を盛り上げるために男だけでざくばらんに飲み会を開き、気軽に話せる場をつくろうと、会長と庶務を務めていた土田忠明さん(77歳)を中心に発足した。会員は18人。顔見知りであってもなかなかじっくりと話す機会のない男性たちが、お酒の力を借りながらさまざまなことを語り合う場だ。

「本当は月に1回くらいは開きたいんだけどな」と土田さんは話す。開催日は次回当番の人に決める権利があるので、次

の開催が翌月になるのか、半年後になるのかわからない。「次回がいつになるかわからないから、話し残すことがないようになっている」という。その出たとこ勝負っぽさと、豆腐一丁のコンセプトが、男性だけの会ならではの、おもしろさであり、人を引きつける理由だ。

(『地域生活応援誌 Juntos』第67号(CLC刊)を再構成)

## → 東北で活かせる!

- プログラムなしの、なんでも自由な月3回のサロン活動が、逆に日々の楽しみを増やす。
- 「豆腐一丁あればお酒が飲める」という男性サロンのあり方は、ぜひ真似たい。

# 農業を通じた コミュニティづくり

シルバーパワークラブ（秋田県湯沢市）

慣れ親しんだ畑仕事で  
元気づくる

のどかな田園風景が広

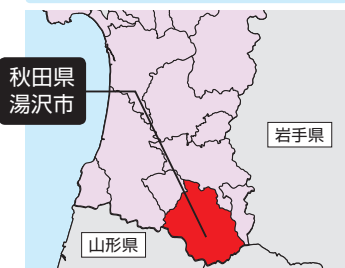
がる秋田県湯沢市の一画、  
遠くには霊峰鳥海山も一  
望することができるとこ  
ろで、シルバーパワー



里芋の収穫。このあと芋の子汁にして味わいました

秋田県湯沢市

人口 48,351人  
高齢化率 34.8% (2015.7.31 現在)



クラブは活動している。もともとは県の農園体験事業の一環として活動してきたが、県の方針変更から助成を受けられなくなり休止状態になったことから、活動を継続したいと願う有志によって誕生した。農業を通じたコミュニティづくりを目的として、参加者がこれまでに培ってきた経験や知識を活かしてそれぞれが自分たちで役割を見つけて、一人ひとりが主体的に行動し互いに尊重し合う。「みんなが誰かに縛られたりすることなく、『この指とまれ』の精神で自由に活動しています」と話すのは、団体の発起人であり世話役の黒田務さんだ。

「参加する人たちはみな、いきいきとして元気に満ち溢れている。『農作業に就けばお年寄りも元気になるんです』と黒田さんが語るとおり、まさに水を得た魚のようにどの参加者も元気いっぱいだ。

「めんどくさがりだから、みんなに任せっきりなのさ」と冗談交じりに話すのは、「父さん」の愛称で親しまれている代表の倉田勇次さんだ。その言葉とは裏腹に、自ら率先して収穫した作物を一輪車で運んだり、畑を見回って確かめるなど、監督役としてあちこち動き回る。

## 収入という形で

### 頑張りが還元

収穫した作物は、調理してその場で参加者たちに振る舞うほか、漬物に加工するなどして地元のお宅を個別に訪問して販売も行い、収益を上げている。

販売を担当するのは倉田さんの奥さま、ふみさん。元ヤクルトレディの経験からセールスはお手のものだという。

こうした努力から、一昨年度は肥料代などを引



手作りの東屋で、自家製の漬けものを持ち寄って収穫祭

けばプラスマイナスゼロだった収益が、「みんなであらゆるものを食べに行こう」と言えるほどに伸びてきた。収入はクラブの運営費用として活用されるのはもちろんだが、それ以上に「収入を得る」ことが参加する人たちにとってのやりがいや励みにつながっている。

農作業を一緒に行うなかで、参加者たちには互いに支え合う強い絆が生まれている。ある参加者は、自宅が火事に遭ったことで途方に暮れていたが、ほかのメンバーが励まし支えることで立ち直ることができた。また、高齢のため足腰が弱まった女性がクラブを訪れた

際には積極的に手を貸すほか、一人で過ごすことが多い人にも声を掛けて交流をはたらきかけている。

みな、太陽のように周りを明るく照らし元気をふりまいていっているように見えた。

〔地域生活応援誌 Juntos 第81号(CLC刊)を再構成〕

一方で、クラブの活動に対して地域からの理解が得られないなど、苦労することもあるという。そのため、昨年より赤い羽根共同募金の助成金を活用し、外部団体との交流や視察を計画中だ。

**お年寄りの元気が地域を明るくする**

参加者同士が結びついて元気になることで、やがてそれが広がって地域全体の元気につながる。常日頃から地域を見守っているお年寄りが元気でいきいきと暮らしているからこそ、その背中を見て育ってきた人たちも元気になるのではないだろうか。

おしゃべりのなかで黒田さんが、参加者の一人を「天照大神（日本神話の太陽神）のようだ」と例える場面があったが、まさに参加する人たちが

**→ 東北で活かせる!**

- 長年担ってきた農作業を、サロンの場にしよう!
- 農作業や食品加工・販売をとおして、高齢になっても役割をもち、さらに賃金を得ることは喜びと生きがいにつながる



悠々の年末餅つき大会の風景

泰阜村地域交流センター悠々（長野県泰阜村）  
**組合で支える、地域での生活**

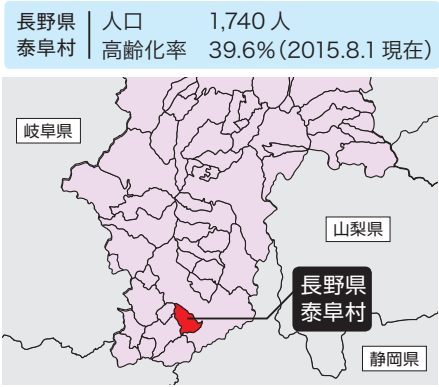
長野県南部の泰阜村やすわかにある、「泰阜村地域交流センター悠々」は、地域住民の交

流の場や、介護などのケアを必要とする人たちの生活を支える場として、「高齢者協

同企業組合泰阜」による運営のもと、村内外の多くの人たちから利用されている。工場跡地にまちづくり交付金で建てられた191坪の総檜づくりの建物は、2009年5月に開設して以来、学校帰りの子どもからお年寄りまで、組合員を中心とした幅広い年代層の人たちの憩いの場となっている。

**ふるさとをたいせつにするふれあいの場**

同センターは、人口約1800人、高齢化率38%の泰阜村に住む人たちが、住み慣れた地域で生活し続けることを主な目的として、理事長の本田玖美子さんの提案で設置された。センター内には、地域の人た



ちの集いの場を充実させるため、畳に掘りごたつのあるスペースや、大勢でテーブルを囲める食堂、大人や子どもが楽しめる図書コーナーなども設けられている。組合員は自分用のイ草枕を購入して置いてあり、まるで自宅のようにくつろいでいる。

大勢でにぎやかに過ごすための伝統行事も開催しており、餅つきやしめ縄づくり、盆踊りなど、伝統の継承に配慮し、住

民同士で交流を深めている。催しによって、子どもとお年寄りの年代間格差を超えて、孫と祖父母のようにふれあうことができる。

### 高齢者共同住宅として暮らしを支える

交流スペースの周りには、10戸の個室が配置されており、「悠々長屋」と名付けられている。長屋のように並ぶそれぞれの部屋は、トイレ、キッチン、冷蔵庫、押し入れなどが設けられた1DKの造りで、7戸は賃貸契約をす



センター内の見取り図

る入居者用、3戸は村民の制度外のショートステイ用に使用されている。各部屋の出入り口は格子とふすまで仕切られており、日本の昔ながらの長屋のように、部屋の外の声や、隣近所の部屋の音も聞こえるようになってい



テーブルを囲み、皆で食事

近くに人がいること、一緒に生活している人たちがいることの安心感を得られ、入居者もあまり寂しさを感じないという。

同センターの入居者は、認知症の人や、要介護度が高く体が不自由な人も多く、職員のケアを受けながら生活している。介護保険制度による規制をできるだけ避け、独自に制度を活用することで、利用者本人の気持ちや需要に合わせた、より柔軟なサポートをしている。入浴介助やそのための送迎も行っているほか、通院介助や買いもの代行などのサービスもあり、センターの外でも村民の生活を支えている。

泰阜村の出身ではない都会の人たちにも魅力を感じてもらい故郷のように思ってもらえるよう、地民営業許可をとり、地域外から来る人の宿泊施設としても機能している同センター。組合員が年間に一定時間以上の清掃・整備活動を行うことが規定されており、職員だけでなく、一般の組合員の手で設備が維持されている。地域を愛する人たちの気持ちだが、村の内外の交流を育んでいる。

清



畳に腰かけておしゃべり

## → 東北で活かせる!

- 組合を立ち上げて、故郷での生活を自分たちで支える。
- 地元で介護等のケアを受けながら生活し、そこにほかの住民が集まれば、地域での暮らしがいっそう楽しいものに。



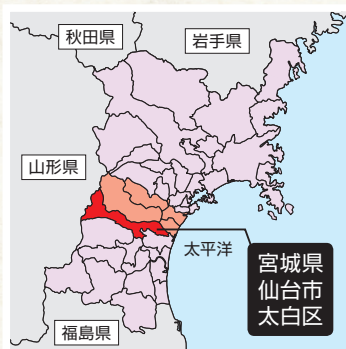


# 初の入居者交流会 支援者連絡会主催で

あすと長町復興公営住宅  
(宮城県仙台市太白区)



交流会のチラシを戸別訪問で配った(写真提供: 太白区社協)



今年4月に入居が始まった、あすと長町復興公営住宅(災害公営住宅、13階建て1棟163戸、仙台市太白区長町4丁目3・58)の集会所で6月7日、初の交流会が開かれ、入居者70人あまりが参加した。

プロの音楽家3人がバイオリン、クラリネット、ピアノの三重奏を披露。続いて、飲み物や菓子がかかるまで、和やかな雰囲気なか、入居者が自己紹介などをして親交を結んだ。同住宅でひとり暮らしの60歳代

の男性は、「同じ階の人の名前も顔もわからない状態なので、とてもありがたい。また参加したい」と喜ぶ。

主催は、あすと長町第1・3復興公営住宅支援者連絡会。連絡会は、入居者の孤立防止や交流促進、自治組織の立ち上げ支援などを目的に、区社会福祉協議会が結成を呼びかけ、今年1月設立された。メンバーは、地元の町内会や地区社協、地区民生・児童委員協議会(地区民児協)などの住民団体に、区役所、区社協、地域包括支援センター、それにあすと長町地区の仮設住宅と復興公営住宅で入居者支援を続けてきた東北工業大学工学部建築学科、オプザーバー参加の市生活再建推進室を加えた計16団体。連絡会はこれまで、先行事例を参考に、活動内容やメンバーの役割分担を決めるなどの準備を、住民団体の主導で進めてきた。

4月には、地域情報マップが完成。民生・児童委員や地区社協の役員や福祉委員らが、連絡会の紹介と見守りを兼ね、戸別訪問で



プロの音楽家が、交流会で演奏を披露

配付した。戸別訪問は5月にも、交流会のチラシを配る際に行った。

連絡会の見守り部会を担当する地区民児協の会長・横山洋子さん(72歳)は、「独居世帯(約50世帯)の3分の1程度は、高齢や体調不良などのため継続的な見守りが必要」とし、そのうえで、「入居者主体の見守り体制を早くつくり、民生・児童委員だけでなく、行政や社協とも連携できるようにしたい」と訴える。

入居者同士の見守りなどをスタートさせるには、同住宅内の自治組織の立ち上げが不可欠だ。連絡会副会長で地区社協会長の庄子誠喜さん(70歳)は、「交流会

で入居者同士の関係づくりを進めるとともに、リーダー役となる人材を発掘したい。自治組織の立ち上げには、行政のあと押しも重要。連絡会のなかで役割分担をしながら、入居者の意見もよく聞き、しっかりと支援していく」と意気込む。

連絡会は、あすと長町第3復興公営住宅(諏訪町2・8、7階建て68戸)でも同様の支援を行っている。**木**

## DATA

### あすと長町第1・3復興公営住宅支援者連絡会

会長=関口吉信(郡山地区連合町内会会長)

構成団体(名簿順)=郡山地区連合町内会、郡山地区社会福祉協議会、郡山地区民生・児童委員協議会、郡山赤十字奉仕団、郡山地区募金会、東北工業大学工学部建築学科、八本松市民センター、郡山地域包括支援センター、太白区(まちづくり推進課、区民生生活課)、太白区保健福祉センター(管理課、家庭健康課、障害高齢課)、仙台市社会福祉協議会中核支えあいセンター、太白区社会福祉協議会、仙台市生活再建推進室(オプザーバー)  
事務局=太白区社会福祉協議会(仙台市太白区長町南3-1-30 TEL 022-248-8188)



# 生活支援から地域づくりへ

## 新潟県中越大震災の被災者支援(下)

### 新潟県長岡市山古志地域(旧山古志村)

新潟県中越大震災(2004年10月23日発生)で甚大な被害を受けた旧山古志村(現長岡市山古志地域)。全村避難、仮設住宅への入居、村への帰還、そして今日まで続く集落再生の取り組みは、中山間・過疎地域での生活再建支援と地域づくりに関する、貴重な先例だ。

#### 「集落」を意識した支援

山古志は、急峻な山々に囲まれた14の集落からなる。冬は数日の積雪に覆われ、春から秋にかけては、山腹の棚田が風景にのどかな彩りを添える。

震災では、土砂災害が多発し、電力線などのライフラインや道路が寸断。崩れた土砂が川をせき止め、一部集落が水没するなどした。村民向け仮設住宅は、旧長岡市(現長岡市長岡地域)内に3か所設置。震災から

約1か月半後12月10日、集落単位で入居が始まり、同日に完了した。当時村に住んでいたおよそ1800人約600世帯のうち、最大1779人562世帯が仮設住宅で生活した。

震災半年後の05年4月、市町村合併で村は、新・長岡市の一地域となる。

住民の帰還は、05年7月以降、避難勧告の解除に合わせて段階的に進み、07年12月末には、仮設住宅からの退去が完了。最終的に、避難者の8割近い約1400人が帰還した。

山古志地域の被災者向け公営住宅は、06～07年度に計8団地35戸が完成(図参照)。今年6月1日時点で25世帯45人が入居している。生活再建の流れを仮設住宅・帰還・集落再生の3段階に分けると、その支援は、仮設住宅から帰還までを生かす支援相談員(以下、支援

員)が、集落再生を地域復興支援員(以下、復興員)が担う形になっている。

支援員は、県社会福祉協議会が雇用し、市社協山古志支所(合併前の村社協)へ配属した。人数は当初3人で、その後5人に増員。活動期間は、仮設住宅への入居完了後の05年1月から、08年3月までの約3年。この間、総合的な生活相談の受け付けと行政や各種民間サービス(医療・介護など)へのつなぎ、戸別訪問による見守り、傾聴、サロン活動のほか、災害ボランティアセンターの運営も手がけている。

支援活動は、仮設住宅の段階から集落コミュニティを意識したものだ。支援員のリーダーを務め、現在は復興員として活躍する井上洋さん(37歳)は、次のように語る。「継続的な見守りが必要かどうか判断に迷うような

場合、集落区長など住民の顔役に問い合わせれば、『あの人は大丈夫』とか、『あの人は注意が必要だから、私たちも気をつけておく』などと返事があり、対処方法を決めることができた」

集落のつながりを生かした支援を行うまでには、失敗も経験している。「仮設住宅で、若干の生活介助が必要な人の面倒を、同じ集落の住民が見ていた。それを知らずに私たちがひんばんに訪問すると、その人は『私が行かなくても、支援員に任せておけばいい』と。これはまずいと思い、私たちの訪問の仕方や、住民との協力態勢を再検討した」

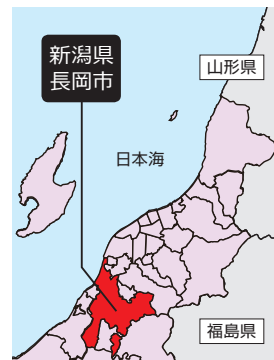
「仮設住宅で、若干の生活介助が必要な人の面倒を、同じ集落の住民が見ていた。それを知らずに私たちがひんばんに訪問すると、その人は『私が行かなくても、支援員に任せておけばいい』と。これはまずいと思い、私たちの訪問の仕方や、住民との協力態勢を再検討した」

#### 地域復興支援員が活躍

帰還が進む時期にも、転居支援や仮設住宅に取り残される人への対処、自宅で



地域復興支援員の井上洋さん



復興員は、県の復興基金事業を活用し、市が設立した「公益財団法人山の暮らし再生機構」に所属。山古志地域では、支援員が復興員に転籍し、被災者支援の経験を生かすことができた（ほかの被災地域・市町では、改めて公募による採用が行われ、支援員からの継続雇用はなかった）。同地域への配置人数は当初5人で、現在は4人。このうち井上さんをはじめ3人が、支援員からの転籍者だ。08年4月に活動を開始し、現在まで続く。少なくとも今年度から3か年は、同基金を財源とする復興員の配置事業が継続される見通し。

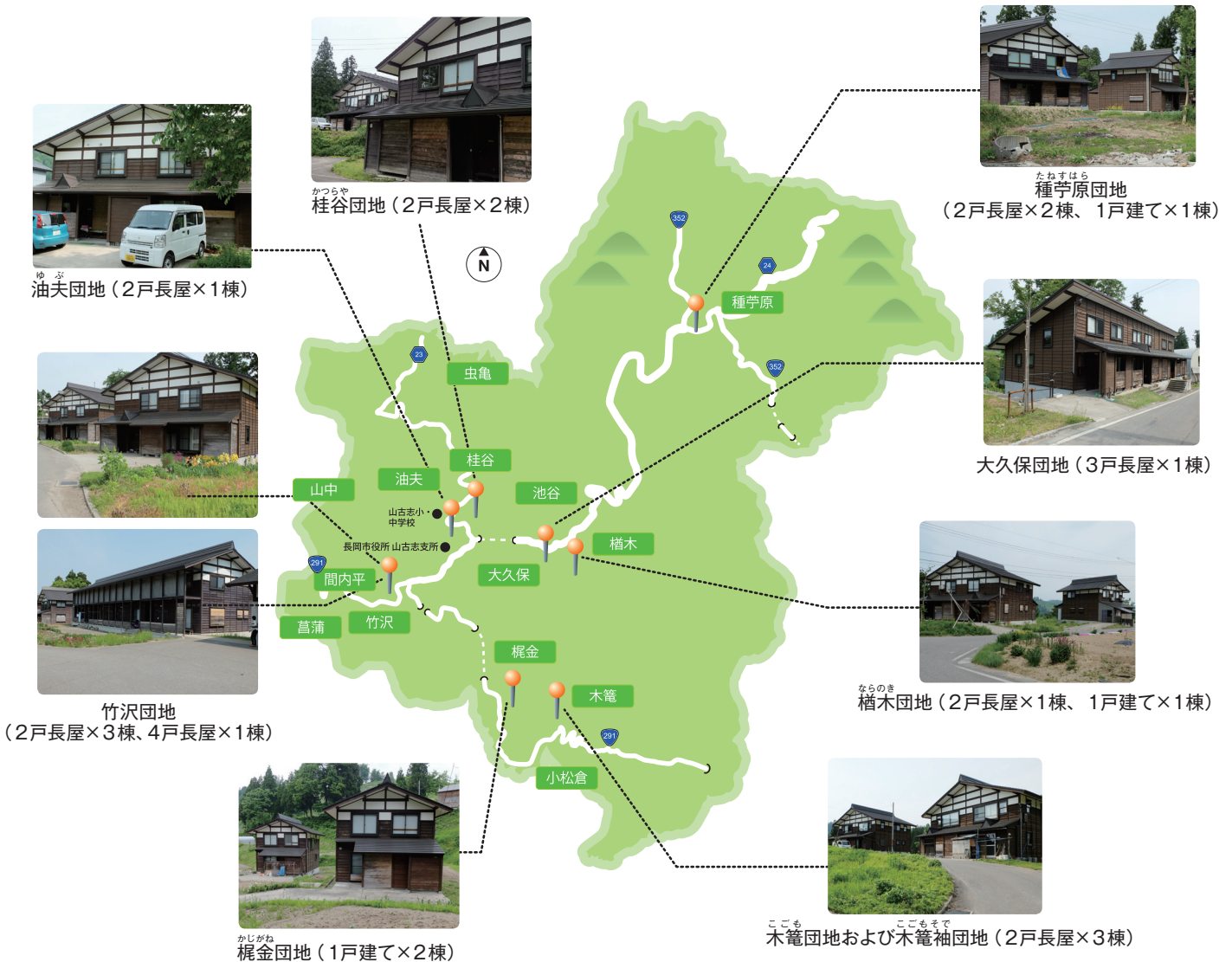
これまでの主な取り組みは、集落再生（伝統行事の復活や住民支え合いサービスマス事業「宅福便」導入の支援など）、農産物直売所などの住民活動支援、郷土料理教室といった交流の場づくり、外部ボランティア受け入れ、交流・健康づくり・景観整備をセットにした「花いっぱい運動」など極めて多彩。いずれも主役はあくまでも住民で、復興員は裏方として企画・調整

を担う。住民と行政の間で立つて、双方の円滑な意思疎通を図っている。

住民、復興員、行政の協議・協働の場として「山古志住民会議」があり、ここで地域課題の整理と、解決に向けたアイデアの検討が行われる。事務局は、復興員が務める。

同地域の人口は、今年5月1日時点で445世帯1106人。7年あまり前の帰還時点から300人ほど減っている。地元関係者によると、高齢者の死亡に伴う自然減で、人口流出は起きている。「帰還して、再び出ていった人は皆無」（関係者）という。豪雪の山間過疎地域としては、異例と言える。高齢化率は4月1日時点で47・8%。震災前より約10ポイント上昇した。井上さんは、「元気な高齢者が多い。悲観する必要はない」と語る。

震災と全村避難を経験した山古志では、住民にも支援者にも、集落を離れず暮らし続けられる地域をつくらうという、強い意志がある。これこそ、被災地復興に最も必要な条件だろう。木



図・山古志地域の復興公営住宅（計8団地 35戸）。入居者が出身集落で暮らせるよう、集落単位で整備された



支え合い  
S-1 グランプリ  
第2回 いがす大賞

被災地の優れた住民支え合い活動を掘り起し、称え、広く発信するS-1グランプリ。第2回大会(2015年2月15日)の応募者、入賞者のアイデアと実践を、連載形式で紹介していく。



S-1グランプリで、活動内容や思いを前面に出した、勢いのある発表を称える「おらほ賞」を受賞したのは、『原っぱサロン』特定非営利活動法人Jinだ。今大賞における発表団体のなかでは最年長ながら、元気のある活動発表を見せてくれた。

福島県本宮市で特定非営利活動法人Jinが運営する「浪江町サポートセンター本宮」では、毎週月曜日から金曜日、14時から16時の間に「原っぱサロン」が開かれている。震災の被害を受け、仮設住宅に住む人たちのために始められたものだ。発表当時、そこに通っていた7人の女性は、平均

年齢80・4歳。そのうちの3人が、S-1グランプリの会場に足を運び、発表のアシスタント役を務めるサポートセンターのスタッフとともに登壇した。サロンの参加者には、一時期は「支援してもらおう」という受け身の姿勢も見られていたという。しかし、同じ仮設住宅からほかの地域に転居する人たちを送り出していくなかで、「どこに行っても自分らしく生きていくためにはどうしたらよいか」ということを考えるようになった。今では、「独りになって大丈夫」「やればできるよ」をテーマに掲げて、サロンの活動でも自発的な発言や行動を心掛けている。たとえば、サロンで料理をするとき、事前に献立をたてたり、材料を準備したりするのも、参加者が中心となって意見を出し、進めるようにしている。

ほかに、サロンでは小物づくりや体操などに加えて、花見や旅行など、さまざまな活動をしている。どのような活動においても、Jinの職員は、「やりすぎない」「やるより、やってもらう」「そつと見守る」という姿勢でサロンに携わっている。職員が必要以上に手伝ってしまおうと、参加者のためにはならないからだ。発表の中で、ひとりの参加者は、日々の生活の一番の楽しみを「サロンに行つて、みんなとおしゃべりをする」と話した。一方的に支えられるための集まりではなく、仲間とともに自身の力を伸ばすための集まりならでは、楽しみや愛着がそこにあるのだろう。



旅行先での集合写真

# 子どものありのままを受け止め、 支えることのできる社会を作る

宮城県石巻市◎特定非営利活動法人 T E D I C <sup>テディック</sup> 代表理事 門馬 優さん



代表理事の門馬優さん

東日本大震災後、宮城県石巻市を中心に学習・居場所支援や不登校支援に尽力している特定非営利活動法人 <sup>テディック</sup> TEDIC 代表理事の門馬優さん。学校や公民館で、大学生が中心となり、子どもの学習環境を整えたり、居場所を設けて「ひとりぼっちがいないまち、石巻、社会」づくりに励んでいる。

## 学習・居場所支援 / 不登校支援

東日本大震災の発生当時、大学に通いながら東京で NPO の職員をしていたということもあり、地元石巻市の避難所などで早くから支援活動に携わりました。そこで子どもの学習支援などをしたことが、TEDIC の活動につながっていきました。

学校に行かない子どもがいれば、自分の物差しで判断しないで、その子自身が一体どう思っているのか、そういうところを受け止めるというか、たいせつにしないといけないと思っています。「不登校」など、いろんなレッテルを貼られている子どもたちがありますが、「それはさておき、お前はどうか考えてるんだよ」っていうことから始めないと意味がありません。

地域全体で子どもたちを支えるためには、どうしたらいいのか、自分たちはどのようなポジションをとった方がいいのかをよく意識して事業に取り組むようにしています。その際、学校、NPO、専門機関、さらに制度のあり方やアプローチの仕方など、地域の全体像を思い描きます。

子どもへの直接的な支援は、結局、川下の支援でしかない場合があります。その子が抱える困りごとの根本的なところにさかのぼらないと、何も変わりません。例えば、不登校の原因になりえる貧困に関しては、学校が貧困対策のプラットフォームとして機能できるように支援していくことや、子どもを取り巻く家庭や保護者を支えられるように、スクールソーシャルワーカーや民生委員、ケースワーカーなどと連携していくこともたいせつだと感じています。(談)



# 仮設住宅整理統合時の課題と対策

社会福祉法人 長岡市社会福祉協議会 本部事務局地域福祉課 課長 本間和也

2004年10月に発生した新潟県中越大震災において、震災発生後2年から3年の間は、支援活動の転機となった。

長岡市（合併前の旧長岡市地域）では、計8か所の仮設住宅団地が設置されていたが、06年4月に最初の復興公営住宅が完成し、以後、時間の経過とともに仮設住宅入居者は減少していった。

これにより、06年10月には、小規模である4か所の仮設住宅を閉鎖し、残りの4か所の大規模仮設住宅に統合する計画が出され、同年12月までに整理統合が行われた。

仮設住宅の整理統合により、新たな仮設住宅に残る人は必然的に再建が難しい世帯となり、そこには高齢者が多く残ると予想された。さらに暮らしの場の変化により、新たな環境への適応に迫られることになった。

この状況から、長岡市社協は従来からの支援目標である①孤立死防止・閉じこもりの防止、②入居者同士のつながりづくり、③暮らしの不便・不安感の解消、の3つに、④取り残され感の軽減・解消を新たに加えた。

これらの支援目標を基に、具体的に実施した支援活動としては、生活支援相談員が従来から行っている見守り訪問活動と仮設住宅集会所を活用したサロン活動の継続であった。ただし、見守り訪問活動については、従来の活動よりも回数と時間を増やした。また、戸別の訪問に併せ、生活支援相談員がイベント時や仮設住宅集会所に向き、1日1回はなんらかの形で入居者と顔を合わせるようにし、見守りのさらなる強化を図った。

仮設住宅入居者に対する見守り訪問活動は、被災者が避難所から仮設住宅に移り住んだ直後の時期がクローズアップされがちである。しかし、再建が難しい世帯として高齢者が多く残り、新たな環境への適応が迫られる状況から、見守り訪問活動については、仮設住宅設置当初よりも、この時期のほうが濃密な支援が必要であった。

この時期の支援を顧みると、関係機関と共通の認識の下、支援活動自体は円滑に実施された感はある。しかし、仮設住宅の統合後、さらに高齢化が進み、近隣同士の自然な見守りや自治会機能が希薄となった面もあり、入居者が従来の生活を維持できない事例も発生した。これに対応するため、生活支援相談員が、自治会機能の代替の役割を果たすなどの、特別な支援を実施した例もあった。

## 仮設住宅の整理・統合

### <予想されたこと>

- ・入居者の減少→再建が難しい世帯：高齢者が多く残る
- ・個々の再建状況の差が見えてくる
- ・整理・統合により、被災者は新たな環境への適応が迫られる

↓  
従来の支援システムの変更が必要となる

確認と把握  
情報共有

【仮設住宅の延長に伴う関係機関担当者会議の開催】  
整理・統合における入居世帯の情報の共有と今後の支援方策の確認

参加者：市建築住宅課、市復興推進室、市福祉総務課、市介護保険課、市健康課、地域包括支援センター、市教委生涯学習課、市社協、他民間支援団体

### 支援活動の目標・目的

- ・「孤立死防止」  
→「閉じこもり防止」  
→「住民同士のつながりづくり」
- ・「暮らしの不便・不安感解消」
- +
- ・「取り残され感の軽減・解消」

### 行動(手段)

- ・見守り活動の再強化  
→回数、時間の増
- ・サロン活動の実施
- 【留意点】
- ・被災者へじっくりと向き合う姿勢
- ・正確な情報提供
- 再建築等に関する憶測の修正

### <結果など>

- ・他機関との共通の認識のもと、円滑に見守りやサロン活動が実施された。
- ・とはいえ、統合後、さらに高齢化が増し、近隣者同士の自然の見守りや、自治会機能が希薄となったことにより、従来の生活が維持できないケースも発生した。



# 宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



## サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

### 高校野球のすすめ

暑い毎日、サポートセンターの皆さん、ご苦労さまです。私はこのクソ暑い夏になると、高校野球が楽しみです。震災前には続けて甲子園へ観戦に行きました。印象に残っているのは、やはりマー君でした。野球小僧というか、ガキ大将という雰囲気、まさかひ弱なハンカチ王子に負けるとは思わなかった。プロでは私の思いどおりの結果になったのですが…。

さて昨年、利府高校が甲子園に行きました。この野球部に、あるサポセンスタッフの息子さんがいます。被災し、つらい想いのなかであって、野球を通じて家族とともに夢を実現した息子さんに乾杯（今日は一段と暑いので、ビールがうまい！）。そして、息子をやさしく見守っていた母親にも乾杯！！（もう一杯、ビール）。このお母さん、笑顔の素敵な社協ウーマン。兵庫県への視察研修で甲子園の近くにある「グループハウス尼崎」をともに見学した際に、「甲子園を目指す息子の母親がいますので、そのうち、こちらに宿泊でお世話になることもあるかもしれません」という話をしたことを思い出します。

今、このお母さんは、サポセンのマネジメント役の重責を担っています。昔は「きれいな人」（今もきれいです…）と想っていましたが、多くのスタッフを抱えての毎日、気苦労を微塵も見せない気の強さ(?)は健在です。

被災者支援で足繁く宮城に来ている豊中市社協の勝部麗子さん。この方の娘さんも野球をしていて、母親としての熱中加減も半端じゃなかった。

二人ともよく似ています。気持ちが若く（見た目も）、コミュニティソーシャルワーカー（CSW）としての熱さも共通。今後は、地域福祉のフィールドで、「燃える女性」として活躍するでしょう。息子と同じく。

## ひとりごと

サポーターのあなたへ

宮城県サポートセンター支援事務所  
アドバイザー 浜上章



### 個別の支援から 地域への支援を考える

地域における人への支援を考えるとき、自分に置き換えて、自分なら地域でどうあってほしいか、自分ならどう生きたいか?と、自分のことに引き寄せて考えることがたいせつだと思います。仕事として割り切って気になる人の安否確認、生活の困りごとについての相談支援で留まることが現実には多いような気がします。

私は、福祉の仕事、特に地域福祉の仕事は、自分の生活や生き方に引き寄せて「自分ならどうしたい?」「どうしてほしい?」とい思いをかぶせて考えてみます。

もし、自分が他者からの支援を受けるとした場合、『安否確認』という名目の定期的な訪問をどう受け止めるだろうか?どんな気持ちができるだろうか?と。「お変わりないですか?」「困っていることはないですか?」というお決まりの言葉かけではなく、日ごろの楽しみや趣味、関心ごと、過去の経験、得意なこと、人とのつながりなど視点を広げて、そこからその人の元気の出るものは何か、ヒントを探します。その人が今、地域で暮らし生きているなかでどんなことを考え、感じているかなどについても聞いてみます。もちろん、タイミングや信頼関係をつくってからですが。その人がどうしたら元気になるか、生き生きと暮らすことができるのか?そのためにどんな支援ができるのか?その人の持っている力、元気のもととは何かを考えます。その引き出しからいろいろと話を広げて聴いていきます。

そして、その人の思いや課題は、同じ住宅や地域に暮らすAさん、Bさん、Cさんにも共通することだったりします。そうならば、同じような人の出会いの場を働きかけます。同じような思いの人の集う場、つながる場を支援者が意識的に設けるのです。そこから何かが生まれたり、始まります。それが個別支援から地域支援の始まりだと思います。

### 平成27年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

#### <市町別事例研究会>

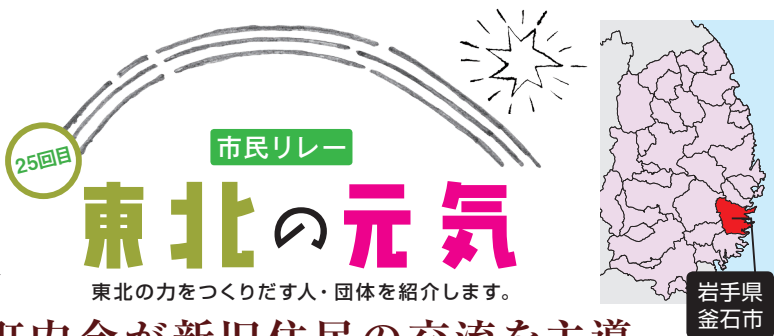
【南三陸町会場】9月1日(火) 場所:南三陸ポータルセンター  
講師:大坂 純(仙台白百合女子大学 人間学部 教授)  
池田昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

#### <災害公営住宅への転居期研修Ⅱ>

【石巻会場②】9月7日(月) 旧 湊荘  
【名取会場】9月8日(火) 名取市商工会館  
講師:永坂 美晴(明石市望海在宅介護支援センター センター長)



栗林共栄会の遠野健一会長（交流と健康づくりを目的に整備した「栗林さんぼ路」の案内板前で）



東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

## 町内会が新旧住民の交流を主導

◎栗林共栄会（岩手県釜石市）  
ライター：元持幸子

今回は...

「栗林さんぼ路」と銘打った2.0〜3.8 kmの計6コースで、総延長16 km。昨年12月に整備がスタートし、今年3月完成した。コースの草刈りや整地などの作業には、新住民も参加。完成後は、新住民だけの入居者も、仮設住宅づくりの場として利用している。

岩手県釜石市の内陸部に位置し、多くの応急仮設住宅が建設された栗林町。最近、住宅を同町で自主再建する移住者が増えつつある。同町の3つの町内会で組織する「栗林共栄会」は、転入した新住民が地域にいち早く溶け込めるよう、さまざまな取り組みを進める。役員は、地域のなかで新住民のつなぎ役を担う。祭りなどの地域イベントの際には、近隣住民とともに、積極的に新住民を誘う。こうした日常のアップローチのほか、懇親会の開催や、新旧住民の協働によるウォーキングコースの整備・活用も行っている。

ウォーキングコースは、「栗林さんぼ路」と銘打った2.0〜3.8 kmの計6コースで、総延長16 km。昨年12月に整備がスタートし、今年3月完成した。コースの草刈りや整地などの作業には、新住民も参加。完成後は、新住民だけの入居者も、仮設住宅づくりの場として利用している。

同会会長の遠野健一さんは、「顔の見える住民同士の関係が、田舎暮らしのいいところ。これからも皆と一緒に活動する機会をたくさんつくりたい」と語る。さんぼ路の整備は、同会のまちづくり構想「くればやし夢プラン」に基づくもの。同会が、市社会福祉協議会に事業化を相談したところ、市社協の事業として採択され、実現の運びとなった。同町は、海岸線から約7 kmの距離があり、津波被害を免れた。仮設住宅は、332戸設置され、6月15日現在、167戸に327人が暮らす。災害公営住宅の建設や防災集団移転はないが、住宅の自主再建に伴う転入は、これまで約30世帯に上り、さらに増加傾向を示す。比較的若い世代が多く、「地域の活性化につながる」と期待されている。なお、同町の人口は、5月末時点で908人、35.2世帯。高齢化率は32.4%で、市全体の35.7%をやや下回っている。

### ☆次号予告 特集「ラジオ体操が生み出す健康と交流」

### 読者の声

購読者を募集しています！  
「月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか？  
購読会員 年3,696円（年12回、送料込み）

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

◎お振込先 ●ゆうちょ銀行振替口座  
口座番号：02260-9-46303  
加入者名：全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、

①お届け先の住所 と ②何号からの購読申込み  
を記入してください。

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ（地域づくり）から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

34号の中の広域避難者を支え合う情報紙で、自分の出身県での支援活動について取り上げられていました。自分が今宮城県ではなく出身県などの被害の少ない県にいても、普段の生活のなかで震災のことを考えていたかどうか、改めて考えさせられました。（仙台市宮城野区 H・S）

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください！  
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737  
E-mail johoh@clc-japan.com

### 編集後記

今回の特集で掲載したもののほかにも、被災地域に活かせる支え合いの取り組みは全国にたくさんあります。また、本紙で取り上げる被災地域の活動をほかの地域で応用してみるのも、面白いのではないのでしょうか。「自分の地元でこんな活動があったら」と妄想するのもなかなか飽きません。（清野）

バックナンバーがホームページで読めます！  
[http://www.clc-japan.com/sasaai\\_j/](http://www.clc-japan.com/sasaai_j/)